

## ■ 特別寄稿論文

## 南山大学人間関係研究センター紀要の発刊によせて

伊藤 雅子  
(南山短期大学名誉教授)

南山短期大学人間関係科は1973年(昭和48年)、その名をもつ日本での最初の高等教育機関として発足した。2年間の短期大学教育は密度の濃い集中したものとして定着していったが、発足当初から教員を中心とした関係者たちは、いつの日か自前で人間関係教育に携わる後継者を養成すること、すなわち4年制となり、さらにその上の大学院教育が可能になることを夢みていた。南山短期大学の経営母体である南山学園の拡大と南山大学の学部改組に伴い、人間関係科が南山大学人文学部心理人間学科に移籍した上で、4年間の人間関係教育の可能性が実現したことはまことに喜ばしいことである。そして、南山短期大学人間関係研究センターも南山大学の研究センターとして新たに発足したことも、短大側でセンターの歩みに関わった一人として心からの喜びを禁じえないものである。

南山大学人間関係研究センターは南山短期大学人間関係研究センターの実績をふまえながら、時代の要請にこたえつつ、より充実した歩みを続けられることを願っている。この紀要の別の個所で南山短期大学人間関係研究センターの歩みをまとめたが、その最後に記した三つの課題は、センターの母体が短期大学から大学に移行しても継承して欲しいと切に願っているものである。

私はこの三つの課題にもう一つの課題を付け加えてみたい。それは、人との関わりにおける「感情の問題」を探求し、体験学習のプログラムとして如何に展開出来るかの研究が進められることである。1990年代の後半にダニエル・ゴールマンがIQ以上に意味あるものとして感情的知力(Emotional Intelligence)という考え方を導入して注目を集めた。私自身は人間関係科創設以来、最初は暗中模索の状態であったが、人間関係科の教育に関わっていく中で「感情の問題」、「感じとることの意味」について気づかされ、考えさせられることが何回かあった。人との関わりにおいて感じとっていくことの意味を学び、自分の中にある感情の畑を耕す機会が与えられたことは、その後の私の中に「宝」として残っているものの一つである。

最近、私はいくつかの著作をひもとく過程で、自分の中の戦争体験を掘り起こす機会に遭遇した。私の小学校・中学校の日々はいつも戦争に明け暮れていたが、少女であったことから、激しい最前線の戦争は体験していない。しかし、当時受けた教育においては、自分の中の感情を抑え、あるいは無視して常に「戦争と言う至上の使命に自分自身をかりたてる」ことを教え込まれたように思う。私たちは自分の中のソフトな部分は、あたかも存在しないごとくに無視して戦争に勝つための使命だけを考えるように仕向けられていったと思う。そして、結果的に、周囲に同調しながら身を守るためであったかも知れないが、自分の中の感情はできるだけ見ないようにして戦争という「一つの理」の部分だけに注目する習慣を身につけていった。そのようにして成人となった自分自身に、あまり疑問を感じてはいなかったが、人間関係科に関わり、いくつかのトレーニングに学生と参加しながら、自分自身の在り方に目を向けるようになった。そこには事柄の説明はそこそこにこなしても、事柄の背後にある人の気持ちや感情の動きに対しては無意識に、時には自分で気づきながら見過ごそうとしている自分があり、人と関わるとき、感情をうまく表現できない自分が居た。今、自分の過去に圧縮された戦時中の教育の記憶を引き延ばしながら、その延長線上にある今の自分の在り方、人が人として関わる中で当たり前を感じることの人間的な意味を模索し始めている。

比較文化精神医学を研究されている野田正彰氏はその著作「戦争と罪責」を、戦争の原因となる歪みを引き継がないために感情を取り戻すこと、傷つくことのできる精神を取り戻すことの意味を述べながら、「感情を取り戻す」という章で結んでおられる。「あとがき」では、マックス・シェーラーによる人間のもつ感情の4つの層に依拠しながら、「近代の日本人は感性的感情のみを研ぎ澄まし、決して豊とは言えない生命感情や心的感情を上乗せし、国家が煽り立てる偽りの精神的感情で武装しているように見える」と指摘し、「感性的感情とイデオロギーにもとづく精神的感情が肥大化し、中間の柔らかい感情はやせている」ことに言及されている。

最近、若者や子ども達の間で、自分の感情とうまく付き合えていないのではないと思われる事例が少なからず見られるが、人間の早期形成期にこそ、豊かな感情体験が大切なのではないかと感じている。

私自身、ここに述べられた「中間の柔らかい感情」とは何かについて十分に考察し、探求するには至っていないが、このことは感情教育のあり方や共感的理解を体験学習することと無関係ではないような気がしている。そして人間性や人の関わりにおけるこの側面をめぐる教育研究を、あらたに発足する南山大学人間関係研究センターの課題の第4番目に加えて欲しいと願うものである。